

松本市教育委員会のキャリア教育の取り組みについて

——松本市キャリア教育推進協議会の実践から——

小山 茂喜（信州大学 全学教育機構 教職教育部 教授）

1. はじめに

平成19年度から松本市教育委員会では、児童・生徒に「生きる力」・「しっかりした勤労観、職業観」を身に付ける施策として、生涯学習課（開始当初は青少年課）の所管として、キャリア教育推進協議会を設置キャリア教育促進事業を実施している。キャリア教育推進協議会は、構成委員の任期が2年で運営されており、平成24年度で三期目が終了し、発足当時社会問題とされていた「フリーター」「ニート」といった話題は下火になったものの、若年層の離職率の問題や就労意識の低下、格差社会や生きがいの不明化といった社会問題は解消されておらず、問題はより複雑化し新たな展開が必要となってきた。

そこで、本稿ではこれまでの松本市の取り組みについての成果と課題をまとめ、今後の視点を示すこととしたい。

2. 松本市のキャリア教育推進の方針について

松本市教育委員会では、平成19年度キャリア教育促進事業の基本方針を「児童・生徒一人ひとりに、生きる力、望ましい勤労観、職業観を身に付けてもらうとともに、自己の個性・適性を理解し、主体的に進路を開拓していく能力や態度、意思を育てる」として、当時の青少年課が主幹となり、キャリア教育の環境づくりを所管の市立小・中学校に対して組織的・系統的に展開し始めた。所管を学校教育課とせず青少年課としたのは、キャリア教育を生涯学習の領域とする国の施策の流れに沿うものであると同時に、松本市における社会的背景について「社会活動などの面で、子どもたちが直接的な体験をする機会や子どもたちがいろいろな経験、技能を持った社会人や異年齢者と交流する場が減少」していると、家庭教育や地域の教育力の低下の改善を考えていたためと考えられる。

そして、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（文部科学省、平成16年）に準拠する形で、以下の目標を設定している。

- ① 児童・生徒の「生きる力」、しっかりとした勤労観、職業観の育成
- ② 児童・生徒の自己効力感の形成
- ③ 将来の夢、希望を描き自分の可能性に気づき、伸ばす子

④ 松本の明日を担う自立型の人材の育成・輩出

その上で、具体的な施策として、

- ① キャリア教育推進協議会の設置
- ② キャリア教育実践プランの作成
- ③ 児童・生徒の発達段階に応じた「育成すべき能力・態度」の明確化
- ④ キャリア教育能力育成プログラム・社会体験プログラムの検討
- ⑤ 地域、学校、企業、行政が連携して職場体験活動等の支援体制の整備
ジョブシャドウイングの実施
- ⑥ キャリア教育研修会の実施
- ⑦ 経済団体との連携による経営者講演会の実施
- ⑧ PTA、地域へのキャリア教育の啓発（広報活動）

種別	団体名・役職
有識者	信州大学准教授
	松本大学講師 [副会長]
	NPO法人理事長（産業カウンセラー）
産業関係	松本商工会議所会頭 [会長]
	松本商店街連盟会長
	松本青年会議所理事
地域関係	長野県経営者協会中信支部副支部長
	松本市PTA連合会幹事
	松本市社会福祉協議会地区センター長 子どもの心身に健康な成長を願う親の会代表
教育関係	松本市小・中学校長会会長
	松本市小・中学校教頭会会長
	松本市第11学区高等学校校長会会長
行政関係	長野県若年者就業サポートセンター所長
	松本市教育委員会指導室長

事務局

役職
教育部長
青少年課長
青少年課勤労青少年ホーム所長
学校教育課指導室指導主事
青少年課主査

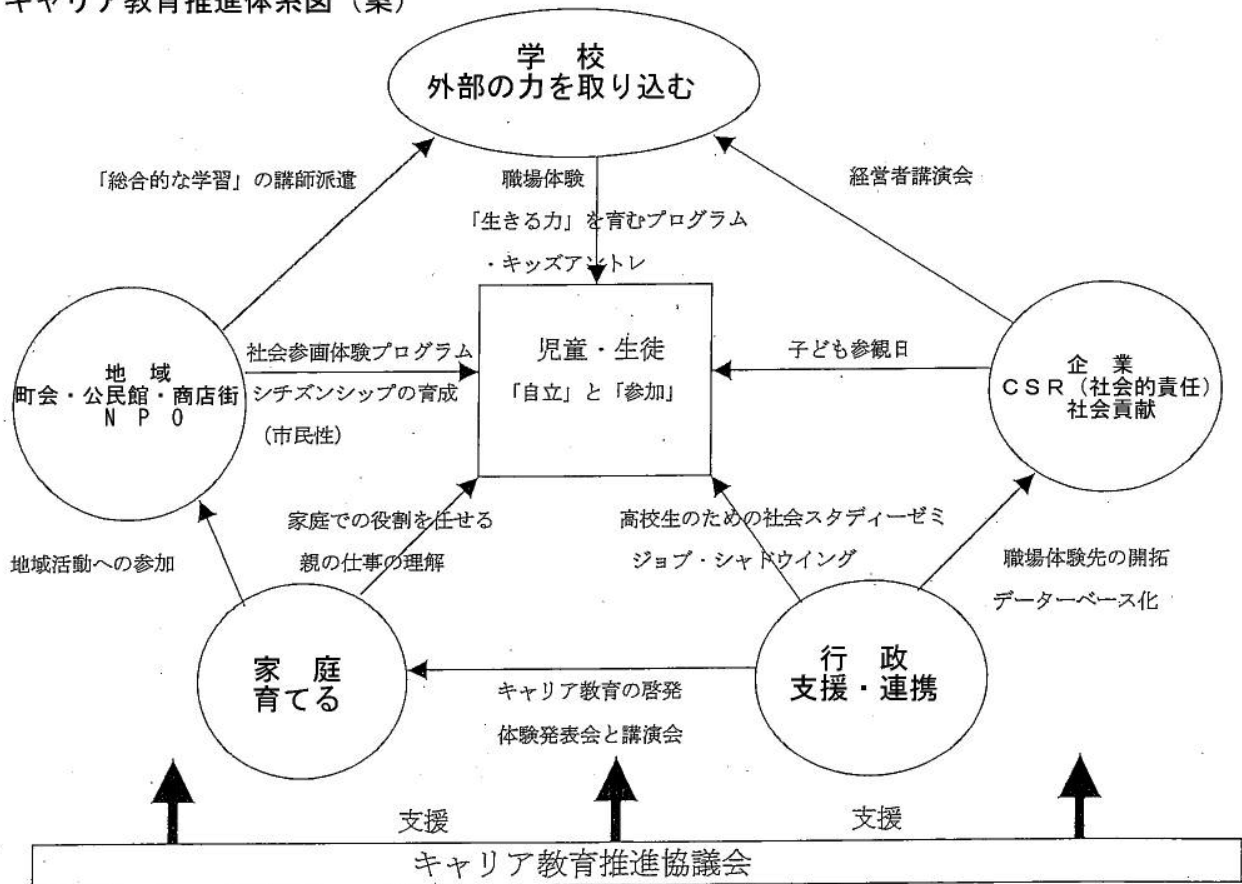
ここでのポイントは、キャリア教育実践プランを作成し、学校教育を中心に家庭や地域を取り込みながら、小学校段階から高等学校段階までの一貫した系統的・継続的な、プログラムの運用を試みたことである。

そのために、左表に示すように、有識者・産業関係・地域関係・教育関係・行政関係の委員から構成されるキャリア教育推進協議会が下支えとして支援する体制を設計したことである。さらに、地域の教育力に期待したことから、1期目の協議会の会長を地域の産業関係を代表する委員が務めたことも、学校教育と家庭教育さらに地域の教育力が密に連携しながら展開してい

くという意気込みがみられた。

さらに、平成19年度内に、方針に則した形で、以下に示すようなキャリア教育推進体系図を作成して、学校・家庭・地域・企業・行政それぞれの関わりを視覚化して、市民に理解を図ろうと試みている。

キャリア教育推進体系図（案）



3. 平成19年度に企画した施策

前述のキャリア教育推進体系図に基づいて、以下の事業が計画され実施に移された。

ここで特筆すべき事業は、小・中学生向けの「生きる力」育成プログラムとして、京都教育大学附属中学校が中心となって開発した起業家教育プログラムの「キッズアントレ」を採用した点である。

アントレプレナー教育は、身近な起業家の活躍を参考に、学び手である子どもたちの夢や理想を語り合いながら、現実社会とのかかわりを持ちながら、意思決定の過程を学ぶながら自己理解や自尊感情を育成することを目的とすることから、松本市のキャリア教育の基本方針と多くの部分で共通するものがあつた。

そこで、松本市教育委員会としては、「キッズアントレ」は、ネットワークを活用したプログラムであることから、情報教育の普及とも関連づけて、総合的な学習の中で展開することで、情報教育とキャリア教育の2領域の充実を同時に図ろうとしたともいえる。しかし、「キッズアントレ」は、アントレプレナーシップ開発センターとの契約が必要で、予算

措置が必要なことから、市内全校で実施することは困難で、年間小学校4校中学校2校程度が限度という制約があり、市内全校で同時に実施ということはできないという課題を抱えたままの施行となった。

また、基本計画で謳った小学校段階から高等学校段階までの系統的なプログラムの開発という理念に基づいて、高校生のための社会スタディーゼミを企画したが、小・中学校とは異なり、松本市内の高等学校に通ってくる生徒は、松本市内在住の生徒だけとは限らず、近隣の市町村から通ってくる生徒も多いことと、それぞれの高等学校の環境の違いもあり、企画の総論に賛同は得られても、実施に伴う各論になると各校の事情が大きく影響し、足並みをそろえて実施とはなかなかいかない状況のまま展開していくこととなった。

対象	事業	内容
小・中学生	キッズアントレ	地元人材を活用した問題解決型プログラム
小・中・高校生	社会参画体験プログラム	地域課題解決等を目指す社会貢献型体験学習 まちづくり、環境、福祉、国際理解等のテーマ毎にワークショップを実施と発表会。
小学生	子ども参観日	小学生が親の職場を訪問して働く姿を見ることにより、働く意味を体感してもらう体験活動。 学校の夏休み期間中に事業所毎に実施。
中学生	松本市役所発！ ジョブ・シャドウ イング	中学生が社会人に「影」のように密着し、職場の様子を観察、体験。学校の夏休み期間中に中学校1年生を中心に松本市役所で実施。
	経営者講演会	経営者が「働くことの意義」「仕事の面白さ」等について中学生に講義。中学生2年生を対象に職場体験前に実施。
	キャリア デザインノート	中学校2年生の職場体験時、事前、事後学習用ノートの作成
高校生	高校生のための 社会スタディー ゼミ	社会の第一線で活躍する社会人に仕事のやりがい等について高校生に講義。
地域	体験発表と 講演会	子どもを地域全体で育て、キャリア教育の共通理解を図るために実施。
	キャリア教育 ニュース	キャリア教育推進協議会の取り組みについて、ニュースを発行して周知する。
	リーフレット	キャッチフレーズを入れたリーフレットを作って、キャリア教育の推進、啓発を図る。

4. 平成19年度実施成果について

平成19年度の実施成果は以下の表の通りで、基本方針で連携を強調していることから、まずは実施できそうな事業数の確保に追われた感がある。

松本市教育委員会のキャリア教育の取り組みについて

また、参加状況はどの事業も決して高いとはいえず、周知が難しいという点と、学校行事・地区行事等との調整がなされないまま、行政主導型で展開したことから、連携を最大のポイントとして謳っていたにもかかわらず、学校・家庭・地域それぞれでの対応が機能してない状況であった。

学校教育に対しては、職場体験等がキャリア教育という意識を変革し、通常の学習課程の中にどのように視点を組み込み、体験的な学習を展開していくことの重要性を理解してもらうことの課題が明確になった。

[平成19年度実施事業]

対象	事業	成果
小学生	子ども参観日	市役所を含む9事業所 参加者…小学生107人
中学生	松本市役所発！ ジョブ・シャドウイング	市役所関連17課 参加者…中学校10校100名
	経営者講演会	◎高綱中学校「職場体験に向けての心がまえ、マナー」 八十二銀行西松本支店長 ◎会田中学校「働くことの意味」 ガートナージャパン(株)社長 ◎明善中学校「社会で求められる人材について」 ペックマン・コールター(株)社長
	キャリアデザインノート	全中学校に配布 職場体験受け入れ事業所562社をデータベース化し、全中学校に配布
高校生	高校生のための社会スタディーゼミ	(1) ワークショップ 演劇の要素を利用してコミュニケーション力を高める (2) 講義「放送局の仕事を通して」 講師…NHK長野放送局放送部副部長 (3) 講義「情報雑誌作りを通して」 講師…(株)長野こまち代表取締役 参加者…高校生16名
地域	体験発表と講演会	子ども参観日発表 職場体験発表 講演「21世紀をリードする生徒の育成を目指して」
	キャリア教育ニュース	第1号発刊

5. 平成19年度から平成24年度までの実施事業の変遷

19年度実施事業	20年度実施事業	21年度実施事業	22年度実施事業	23年度実施事業	24年度実施事業
	キッズアントレ ・島内小学校 ・並柳小学校 ・旭町中学校	・梓川小学校 ・今井小学校 ・田川小学校 ・二子小学校 ・旭町中学校 ・高綱中学校	・大野川小学校 ・鎌田小学校 ・田川小学校 ・中山小学校 ・高綱中学校 ・山辺中学校	・開明小学校 ・芝沢小学校 ・菅野小学校 ・田川小学校 ・開成中学校 ・鉢盛中学校	・清水小学校 ・寿小学校 ・旭町小学校 ・岡田小学校 ・女鳥羽中学校 ・波田中学校
	社会参画体験 プログラム ・子ども社会参 画チャレンジ スクール 今井地区 庄内地区 田川地区 ・松本っ子まちづ くりクラブ	今井地区 庄内地区 松原地区 ・松本っ子まちづ くりコンテスト ・子どもプレイ パーク (300人)	・今井地区 ・庄内地区 ・四賀地区 ・松南地区 ・松本っ子ボラ ンティアスク ール (200人)	・庄内地区 ・四賀地区 (400人)	・四賀地区 ・田川地区 ・寿台児童館 ・岡田児童センター ・松南地区 (800人)
	松本っ子の「生きる力」サポーター募集				
ジョブ・シャドウイング	11校 55人	35校 115人	41校 236人	42校 280人	28校 185人
子ども参観日	5事業所 84人	5事業所 53人	5事業所 102人	4事業所 73人	8事業所 188人
経営者講演会 ・高綱中学校 ・会田中学校 ・明善中学校			社会スタディーゼ ミ ・筑摩野中学校 ・女鳥羽中学校	・明善中学校	・高綱中学校
キャリアデザインノート					
高校生のための社会スタディーゼミ					社会スタディーゼミ ・全市対象
体験発表と講演会			松本っ子社会参画 フェア		
キャリア教育ニュース				ポスター	
	リーフレット				
					学都松本いきいき ノート (試行)

[松本市におけるキャリア教育実施事業の変遷]
 (松本市教育委員会資料より作成)

平成19年度企画実施された7事業（子ども参観日・松本市役所発！ジョブ・シャドウイング・経営者講演会・キャリアデザインノート・高校生のための社会スタディーゼミ・体験発表と講演会・キャリア教育ニュース）に、平成20年度には「社会的課題解決プログラムキッズアントレ（以下キッズアントレ）」「社会参画体験プログラム」「リーフレット」の3事業が加わった。

キッズアントレ¹は、当時キャリア教育のあり方が模索される中、情報化教育並びに意思決定能力を育成する起業家教育の充実という観点から開発され、一定の評価を得ていたことから、松本市でも試験的に導入し教育内容の意識変換を図ろうとしたものといえる。

また、社会参画体験プログラムは、地域のために、地域と一緒にテーマに学校と松本市社会福祉協議会が協力して企画した中学生のボランティア活動や小・中学校におけるボランティアの読み聞かせや、小学生の農業体験学習などの成果をベースに、社会の一員としての自覚の育成と、自己効力感の体感を目指して、ボランティア体験・ワークショップ・職業人インタビューなどの体験活動を充実させることで、市民性の育成を図ろうとしたものといえる。

さらに、21年度からは「社会参画体験プログラム」で、20年度実施した「松本っ子まちづくりクラブ」を発展解消して、子どもスタッフが、まちなかの遊び場として子どもが楽しく遊べるイベント「子どもプレイパーク」と、「松本っ子まちづくりコンテスト」が加わった。

24年度には、子どもたちの活動のフィードバックのしくみとして、活動記録ノート「いきいきノート」が配布された。

これら変遷をみていくと、19年度に企画された基本事業は基本的には継承されている。20年に3事業が新たに加わったが、その後も「社会参画体験プログラム」の内容が年を追うごとに、増えてきている。

松本市のキャリア教育推進協議会は2年間1サイクルで運営されているので、節目の20年度・22年度・24年度に提出された課題²からもわかるように、事業主体が生涯学習課であることから、学校教育での成果が期待したほど伸びないことから、生涯学習での活動を充実させることでの充実を図った動きと読み取ることができる。

なお、高校生のための社会スタディーゼミについては、松本市内にある高等学校は松本市教育委員会の所管ではなく県立や私立であること、また、在籍している生徒たちも松本市在住者だけでなく近隣市町村在住者もかなりいること、さらには各校独自に進路指導等を含めてキャリア教育を推進していることなどから、平成19年には実施してみたものの、一律に運用することは難しく浸透には至らなかった。その分、中学校で実施されている職業体験学習等の事前学習等に社会スタディーゼミの趣旨を移行することで、充実を図ろうという試みがなされている。

同様、社会参画体験プログラムにおいても、松本っ子まちづくりクラブの活動は、参加

者の「大人が普段気づかない子どもたちの視点で、住みやすい社会に必要な意見が出された」等成果に対する意見もみられたが、小・中学生の参加者が少なく、学校外の活動として町づくりのワークショップ等は動機づけが難しいという結果となった。

逆に、町づくりワークショップの反省から、子どもたちが企画し運営する「子どもプレイパーク」は、学校外の活動としてもニーズと適合して盛り上がり、回を重ねるごとに来場者も増え充実してきている。

子ども参観日については、保護者の勤務先の対応に大きく左右されてしまうことと、公的機関もしくは大企業に固定されてしまいがちな部分³が今後検討しなければならない内容となっている。

6. 学校教育での「キッズアントレ」を活用した教育実践について

キッズアントレは、京都教育大学の平成16年度科学研究費補助金による開発教材で、ネットワークを活用したプロジェクトベースの課題探究型学習のキットで、開発当時は総合的な学習の時間を存分に活用して、社会の変化に対応しかつ自己実現を果たすために必要な能力と行動力を育成することを目的としていた。

そのため、授業を通して自己に自信を持たせ、創造力、イニシアチブ、チャレンジ精神、コミュニケーション力、決断力、判断力、問題解決能力、チームワーク力といった技能を「授業で使いながら」培うことに焦点を当てた実践を提案している。⁴

しかし、松本市教育委員会が実践導入を始めた時期は平成20年度で、その後平成20年度版学習指導要領へと教育課程が変更されたことに伴い、プログラム開発時のような総合的な時間等を運用しての学習展開は時間的に難しくなり、プログラムの意図は理解できるが、実際の教育現場では対応が難しいという事態に陥ってしまった。

また、キッズアントレを利用するには、契約が必要で市内全小中学校が活用できる予算の保障ができず、毎年数校ずつしか実践ができないということでも、継続性を生み出すことができず、単発的試行の域を出ない教育実践になってしまった。

このことは、松本市におけるキャリア教育推進の事業主体を生涯学習課が担っていることの課題ともいえる。つまり、学校教育の実態把握とカリキュラム編成についての理解が難しいことから、学校現場が置かれている状況如何にかかわらず、新しい施策を導入することで、新たな社会的要請に対応した教育活動が実施できると判断してしまいがちになるという問題が発生してしまう可能性が大きいのである。

内容について、小学校中学校の差がなく教師も子どもたちも充実感を味わっている活動は、地域の素材を扱っているものである。⁵たとえば、山辺中の「地元の食材を使ったお菓子」では、地元のリンゴを使ったケーキ作りを実際に行い販売まで行うことで、生徒が働くことの意義を考える場を得ている。高綱中では、地元の特産品である松本一本ねぎを栽

培し、収穫したねぎで様々な料理の体験をすることで、農作業と調理の2場面を総合的な学習と家庭科とを組み合わせることで、生徒が働くことの意義を考える場を得ている。

また、岡田小のように、国語で学習した「ようこそわたしたちの町へ」の発展学習として、松本市の特徴を調べ、地元の良さの再確認する場を得ている。

エコハウスやごみの始末など、環境問題への対応は、小学校・中学校を問わず取り組みやすい内容で、取り上げているクラスも多い。

小学生の場合は、新しい遊びということにチャレンジするグループも多く、発達段階を反映しているといえる。

児童生徒が主体的に活動した実践報告をみると、どの活動もキッズアントレのプログラムがメインではなく、教科学習や総合的な学習が先に存在していて、その展開の一部としてもしくは動機づけの一部として、キッズアントレのプログラムが活用されている。

逆に、キッズアントレのプログラムから始めている場合は、子どもたちにとっての目的意識が高まらず、テーマ的にはおもしろそうだと取りかかるが、目的意識を継続させることに教師が苦労している部分がみられる。

以上のことから、アントレプレナー教育的な視点を取り入れた学習は、子どもたちの意欲を引き出し、目的が明確になるため主体的な活動へと子どもたちを導くといえる。しかし、キッズアントレのプログラムが、コアになるのかというと、あくまでも教科学習など日常の学習が主で、キッズアントレのプログラムはその学習の発展形と考えた方がよく、かつ、地域の素材を取り上げることに意義があるといえる。

実践校でも戸惑いながら実践した例も少なくなく、教師の反省から戸惑いの要因はキッズアントレのプログラム自体を理解することへの抵抗感（新しい取り組みへの困惑）と、ネットワークを活用することへの苦手意識（教育の情報化への遅れ）や、カリキュラムへの位置づけの不安（学習内容や指導に関するユーザー感覚）などが考えられる。

今後は、アントレプレナー教育の内容を周知し、地域の素材を教材化する視点で、子どもたちの課題を教師が見いだして、教科学習やその発展としての学習展開や、いくつかの教科の学習を関連させた学習展開を教師がデザイナーとして設計することを通して、実践することが重要であるということが、4年間の実践から明らかになってきたといえる。

また、社会参画体験プログラムとの関係でみると、学校教育での実践と社会教育での実践との連携が十分に取れているとはいえない。それぞれの活動を有機的に運用することで、効果が高まると予想される活動も多く、今後一層学校と地域とが、情報交換も含めて連携を深めていくことが必要である。

キッズアントレでの学習を発表会として地域に公開したり、松本っ子社会参画フェアで発表している実践校の児童生徒は、自分たちの学びに対しての実効感を持たたという報告が多いことから、地域に対しての情報発信のあり方も工夫していくことが重要である。

また、チャレンジスクールの地域の活動として、「防災訓練」や「防災マップづくり」など

を展開している事例もあるが、本来学校の教科学習や特別活動などと連動させて子どもたちの視点と大人の視点との両側面から地域を見つめる活動にしていくことが、効率的であると同時に地域に生きる力の養成につながるといえる。

7. 3期の実践から今後のキャリア教育への提言

平成19年から、2年を1サイクルとして、松本市のキャリア教育のあり方の研究は3期実践を展開してきており、着実に成果を上げてきた内容と、再検討しなければならない内容が次第に明らかになってきたといえる。

小学校段階からキャリア教育を推進すべきと、社会的な要請から学校教育・社会教育の双方に課題が投げかけられ、どのように対応するか暗中模索の状態から、これまでの実践例を振り返ることで、何点かの指針を見いだすことができるのではないだろうか。

1点目は、これまでも様々な場面で提案されている内容で、新しさはないが再確認させられた「地域の素材」を学びの対象とするということである。

学校教育の場でも、社会教育の場でも、子どもたちが生活している基盤である地域の素材（情報）について、まずは知ることが生きる力つまりは様々な場面に対応できる力を育成することにつながるということと、子どもたちは主体的に学びを展開するということである。当然、大人も地域の情報について周知していることが求められ、単に子どもたちの学びでなく、地域住民も巻き込んだ地域学習の展開が想定される。

2点目は、学校教育と社会教育のとの連携の充実である。地域の活動と学校の教育活動とが、どの程度連動しているかが大きな課題である。現在でも、学社連携は行われているが、どちらかという融合しているとはいえず、形式的な連携でとどまっていることが多く、そのことから双方の活動内容や目的の共有がなされていないことから、非効率的な活動展開になっていることがおおく見られる。互いの行事の日程確認といった単純作業から始めることで、学習内容への発展なども考えられることから、双方にとって負担感の無い連携のあり方の検討が必要である。

3点目は、子どもたちと社会との接点の構築である。学校教育ではボランティア活動や職場体験、農業体験など、社会教育ではジョブシャドウイング、子ども参観日などの体験型プログラムが数多く実践されてきている。どの活動もそれなりの効果を上げているが、よくみると、系統性や構造化があいまいで、一つ一つの活動が単独で運用されていることが多い。そのため、それぞれの活動に費やす時間と労力も莫大になっていて、子どもにとっても、指導する側受け入れる側にとっても重荷感が発生していがちである。効率化も含めて、発達段階、地域の特性、子どもたちの実態を踏まえて、系統性と構造化を市全体で検討することが重要といえる。このことは、キャリア教育という教育活動を特化した教育活動として展開するのではなく、学校教育・家庭教育・地域での活動といった日常の教育

活動の中に、組み込んでいくことを意味する。つまり、学校では教師が、家庭では保護者が、地域では地域住民やリーダーが、新たな活動を展開するのではなく、様々な活動の中にキャリア教育の視点を意識することが重要になるということである。

【註】

¹ 「キャリア教育を支えるアントレプレナー教育」 上西好悦 日本標準 2006

² それぞれの年度の課題は以下の通り

20年度課題

- ア...今年度は、子ども達が「生きる力」を身につける基礎作りに取り組みましたが、学びを実践に生かせるようにプログラムの内容、地域の連携について系統的に継続できるように検討します。
- イ...生きる力事業（キャリア教育）の理念が市民の皆さんに浸透していないので、市民の皆さんと共有できるように、啓発、PRを推進し、家庭などの教育力の向上も図っていきます。
- ウ...「キッズアントレ」は、総合的な学習の時間に適切なプログラムなので、学年毎に他教科との連携も考えて運用するような工夫が必要です。
- エ...子ども参観日の参加企業、子ども社会参画チャレンジスクールに参加する地区等を増やすように事業の趣旨のPRなどに積極的に取り組みます。
- オ...参加者を増やして、裾野を広げて、多くの子どもたちに生きる力を身につけてもらえるように実施方法等を工夫します。

22年度課題

児童・生徒が地域、社会の課題を自ら考え、行動することで、地域社会の一員としての責任感、主体性及び自己効力感が育成されて、「生きる力」を身につける基礎づくりができました。

さらに児童・生徒が将来、社会的に自立してより良く生き抜く力を育成するために、生きる力育成事業にシティズンシップ(市民性)の視点を組み入れていく必要があります。

地域、家庭、学校、行政が連携して社会体験、社会参画をとおして、子どもに「出番」「役割」を提供して、やり遂げたことを評価する機会を意識的に作っていきます。

24年度課題

平成24年10月よりモデル校にて実施を開始した「学都松本いきいきノート」については、平成28年度の全市での実施に向け、使用状況を確認し、内容の改善を行っていきます。

平成20年度から各校で使用を開始した社会的課題解決型プログラム「キッズアントレ」についてですが、現在の教材は毎年使用できる学校に限られるため、今後どの学校でもキャリア教育の際に活用できる松本市独自のプログラムを検討します。

また、生きる力育成事業において「ジョブ・シャドウイング」等の横文字の事業名称を使用していますが、より親しみやすい名称となるよう、横文字の名称については変更を検討します。

今後も、地域の様々な機関・団体と連携し、子どもたちの多様な学びや体験の機会をより一層充実させていきます。

³ 実施事業所

松本市役所並びに出先機関、大手精密機械製造メーカー、大手医薬品製造メーカー、大手製紙工場、大手農業機械メーカー、大手ジャム製造工場、大規模病院

4 前掲書1 P26

5 20年が～24年度に実施された代表的な活動例

島内小...地球温暖化の問題点

旭町中...高齢者に優しい商品開発

高綱中...松本一本ねぎなどの栽培、エコハウスの提案、遊び道具の作製、ディサービスセンター視察

二子小...プレイランド

田川小...エコハウス

今井小...今井井

梓川小...お店屋さん（アップルケーキ・さつまいもクッキー）、新しい遊び

鎌田小...地元の食材を使ったメニュー

山辺中...地元の食材を使ったお菓子

大野川小...地元のそばを使って新メニュー

中山小...お米を使った食べ物

鉢盛中...新しい遊び、食べ物（さつまいも栽培）

開成中...松本市ブランドプロデュース

芝沢小...ものぐさ太郎祭りに向けての遊び場づくり

菅野小...エコ活動

開明小...住みよい町、二時休みプロジェクト

清水小...姉妹学級と遊ぶための新しい遊び

波田中...地域の達人から学ぶ

女鳥羽中...エコハウス

寿小...エコハウス

旭町小...ありがとうレストラン

岡田小...ようこそわたしたちの町へ（国語）